

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：32639

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23296

研究課題名(和文)国語科と外国語活動・外国語科の間をつなぐ「ことばの教育」の開発に向けた基礎的研究

研究課題名(英文)Basic Research for the Development of "Language Education" Linking Japanese and Foreign Language Activities/Foreign Language Studies

研究代表者

山田 深雪(YAMADA, Miyuki)

玉川大学・教育学部・准教授

研究者番号：90846859

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：研究の成果として、以下の2点が明らかとなった。まず、小学校第2学年児童への英語絵本(文学)の読み聞かせの事例研究から、英語絵本の内容や本の読み方について母語で自由に発話できる状態を保障することが、外国語と積極的な関わりをもつ上で重要であるという点が明らかになった。次に、学習者が他者との間において母語で自由に発話できるためには、対話における寛容性が必要である。第5学年児童への文学の授業実践研究から、説明可能な読みのみならず、学習者自身の内面にある言語化できずにいる不確実な読みや相反する読みなども、自分の読みとして認知する(寛容になる)必要性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、母語と外国語とともに「ことば」として学ぶ価値を、自分の思いや考えを捨象せずに、目の前にある「ことば」を手がかりに、もしくは見付けたい「ことば」を探しながら粘り強く相手とかかわることに置いた。また、そのために必要なスタンスである 寛容 (互いの相違を受け止める寛容)を醸成することは、多様な他者と共生する社会を生きる子供たちにとって重要な「生きる力」となる。

研究成果の概要(英文)：The following two points became clear as a result of the research. First, a case study of reading English picture books (literature) to children in the second grade of elementary school revealed that it is important to ensure that students are able to speak freely in their native language about the contents of books and how to read them in order to have a positive relationship with foreign languages. Next, in order for learners to be able to speak freely in their native language with others, they need to be tolerant in their interactions. The study of literature classes for 5th grade students revealed the need for learners to recognize (be tolerant of) not only the readings that can be explained, but also the uncertain and conflicting readings that they are unable to verbalize in their own language.

研究分野：国語教育

キーワード：寛容 対話 母語 外国語 国語科 相違する意見 文学 自分の考え

1. 研究開始当初の背景

筆者は、文部科学省研究開発学校指定(平成27~令和4年度末まで)福岡教育大学附属福岡小学校において、「未来社会を創造する資質・能力の育成」に向けた新教育課程の開発に携わった。申請者が担当した領域「言語文化」(平成27・28年度)に課せられたのは、母語と外国語をまるごと「言語」と捉えた新たな言語教育をつくることであった。開発のための授業では、以下のような「言葉への見方・考え方」に迫る学習者の姿が多く見られた。

- 互いが伝えたい内容について、自分(母語:日本語)と相手(母語:外国語)が共に知っている英語に変換しながらやりとりを行い、相手に伝わる感覚や手応えを実感する姿。
- ことばは同じ意味のもので言い方や伝え方によって相手がとらえる意味が変わってくることに気付き、ことばの解釈に「正しい答え」がないことにまで考えを巡らせる姿。
- ことばを発する自分自身を客観的に見つめることを通して、課題解決への貢献や自分とは異なる他者の尊重という「ことばの使い手としての ありたい自己」を見出す姿。

筆者は、上記のように教師の予想を超えてゆく学習者の姿から、「国語を正確に理解し適切に表現する(国語科の目標)」と同時に、これからのことばの教育には、多様な言語、ことばそのもの、他者、それぞれへの寛容さが必要であると考えた。一方で、母語を中心とした「国語科」に外国語の要素が入ることで母語の学習が疎かになることを危惧する考えにも研究開発のなかで触れてきた。確かに、教科の枠組みがあることで知識や技能を体系的、効率的に指導しやすい。しかし、分離した教科学習のみに頼っている、学問の発達や分化及び社会の変化によって教科の数が増え、カリキュラムの複雑化は免れない。カリキュラム・オーバーロード(奈須2021)は、学習者の負担を招く。そこで、国語科と外国語活動・外国語科の間をつなぐ「ことばの教育」を開発するための思想的・理論的基盤を構築することが必要であると考えた。

2. 研究の目的

母語と外国語をともに「ことば」として学ぶ価値を明らかにし、それに基づく授業実践の提案と分析・考察を通して、国語科と外国語活動・外国語科の間をつなぐ「ことばの教育」を開発するための思想的・理論的基盤を構築する。

3. 研究の方法

- (1) 母語と外国語をともに「ことば」として学ぶ価値を明らかにするために、まず、国語科と外国語活動・外国語科の教育観を中心に、日本の言語教育の課題について、文献調査及び先行実践の分析・考察を行う。また、小学校現場教員に対する多声的ビジュアルエスノグラフィー調査とその分析によって、日本の言語教育の現状及び今日的な意義や課題を明らかにしていく。
- (2) 本研究の思想的・理論的基盤である寛容思想の変遷について検討し、「ことばの教育」に必要な 寛容 について検討する。
- (3) 国語科と外国語活動・外国語科の間をつなぐ「ことばの教育」を開発するための試行授業実践の分析と考察を行う。

4. 研究成果

研究成果は、「3. 研究の方法」で示した(1)~(3)に分けて記述する。

- (1) 母語と外国語をともに「ことば」として学ぶ価値について
複言語主義・複言語教育は、主として外国語教育及び第二・第三言語教育の分野で推進されている。しかし、国語科教育においても複数の言語的・文化的リソースを学習に生かすことは可能である(浜本, 2008)。我が国においては、ヨーロッパの複言語・複文化主義を直輸入するのではなく、「日本における複言語・複文化主義とは何かを討議すること」(西山, 2009)が求められている。大津(2008)が提唱したメタ言語意識を旺盛にする「ことばへの気づき」活動や大山の「言語への目覚め活動」(大山, 2013)等は、その討議の重要な柱であろう。
本研究では、まず教師が国語科と外国語科の共通性について、どのように認識しているのかを調査するためにビジュアルエスノグラフィーによる質的調査を行った。国語科と外国語科の授業を撮影し(2019年11月)各10分程度のビデオクリップにまとめ、そのクリップを見ながら気になる点ことを話し合う場を設けた(2020年2月)。参加者は、国語科と外国語科の授業を行った教員A・Bと両方の授業を参観した教員C、筆者の4名である。話し合いの中盤で、筆者より「国語科と外国語科の指導において共通すること」を尋ねたが、3名の教員全員が熟考の末に「ない」と答えた。最たる理由は、外国語活動の指導では「型」が重視され、それは国語科の指導とは違うというものであった。だが、外国語活動のクリップにあった「○○さんは、陸上が好きなのに、どうしてI like baseball. って言ってるの?」「だって、陸上の英語カードがないから」という、「思ってもいないこと」を話すコミュニケーションに疑義を呈する学習者たちのやりとりを見た際に、外国語科の指導への違和感を語る教員がいた。教師も学習者も国語科では「自分の考え」が重視するが、外国語科になると無意識的に「自分の考え」の価値を低く見てい

るという課題が見えてきた。このことから、母語と外国語をともに「ことば」として学ぶ価値は、自分の思いや考えを捨象せずに、目の前にある「ことば」を手がかりに、もしくは見付けたい「ことば」を探しながら粘り強く相手とかかわることであると考えた。

(2) 「ことばの教育」に必要な 寛容 について

「ことばの教育」に必要な 寛容 については、山田(2021)の研究内容をもとに述べる。

「ことばの教育」に必要な 寛容 とは、考えや意見の相違を乗り越えて対話を維持する際に機能するものである。コミュニケーションに纏わるペシミズム(コミュニケーションにおいて生じる、自分自身及び未来へのネガティブな期待)は、人と人のあいだにある「外言(話す・書く)」としてのことばの相違だけでなく、「内言(思う・考える)」としてのことばの相違も大きく絡んでいる。しかし、「沈黙」に埋め込まれた内言の解釈は、その場にいる個人に委ねられるため、コミュニケーションに纏わるペシミズムの多くは教師に認識されても、共に学ぶ学習者には認識されることなく学習者の内面に堆積し、「外言(話す・書く)」としてのことばへのコンプレックスに転移するという問題を招いていた。

そこで、相手の「内言(思う・考える)」にも語りかけながらコミュニケーションした中野重治・渡辺一夫「往復書簡」(1949)の考察を手がかりに、コミュニケーションに纏わるペシミズムを乗り越えるための「互いの相違を受け止める寛容」について検討した。

その結果、互いの相違を受け止める寛容は、a:相違の維持のために、相違の内容を丁寧に示そうとする、b:相違する部分について、「外言(話す・書く)」としてのことばだけでなく、そこ表れていない意図や理由(「内言(思う・考える)」としてのことば)に関わろうとする、c:bの際には、互いが抱えている不安や本心をできるだけ隠さずに伝えようとするという三つのスタンスを内包していることが見えてきた。なお、「互いが抱えている不安や本心をできるだけ隠さずに伝えようとする」ことは、ベジャン(2017)の提起した「最低限の礼節」に基づく。

最初の二つのスタンスが満たされることがcのスタンスの条件であり、このcのスタンスが確保されたときに、コミュニケーションに纏わるペシミズムが語られる。以上、abcの三つのスタンスを「ことばの教育」に必要な 寛容 と測定した。

外国語の実践において、まずもって教師も子供も乗り越えるべき壁は、外国語を話すときに、母語で表現することや母語で思考することを禁じられてしまうような錯覚からくる不安や日本語しか話せない自分へのコンプレックスである。それらの不安やコンプレックスを言い表すことによって、見えなかった不安や困難を自分と相手とのあいだで意識化でき、コミュニケーションへの不安が緩和されていく。そのためにも、まずは母語を使う国語科において、cのスタンスを確保することが重要となることが明らかとなった。

(3) 試行授業実践について

試行授業実践では、文学作品を教材として用いることとした。その理由は、文学作品の中にあることばや内容の解釈は、学習者の経験や知識において様々であるため、互いの相違を受け止めるために「ことばの教育」に必要な 寛容 の醸成を図ることができると考えたからである。

実践は、二種類行った。一つは、日本語作品を介した対話実践を行った(以下の)。ここでは、まずは母語を使う国語科において、cのスタンスが確保されることをねらっていた。二つは、文学絵本(日本語及び英語)を介した対話実践を行った(以下の)。ここでは、日本語と外国語(英語)が混在する中でも言語に関する関心を維持し主体的にことばに関わるために必要な方法論を見出すことをねらっていた。各実践の概要を下記の に記す。

文学作品(日本語作品)を介した対話実践の概要

実施日時:2021年2月9日,10日,12日,17日/学校名:東京都私立小学校

学習者:第5学年児童(32名)/授業者:T1を筆者、T2を国語科担当者

単元名:物語を読んで考えたことを話そう(80分授業×4時間)

小学校第5学年を対象とした実践では、自分が選んだ文学作品を読んだ感想を人物Aと人物Bの問答体としての戯文形式で書かせ、同じ作品を読んだ他の学習者と戯文を介して対話する活動を設定した。その結果、意見が相違していることが前提となり、「ただ一つの答え」(難波,2008)を追い求める授業文化とは異なる状況が発生したことから、「互いの相違を受け止める寛容」のcのスタンスである「互いが抱えている不安や本心をできるだけ隠さずに伝えようとする」姿が認められた。「愛されすぎた白鳥」(小川洋子)について三人で対話をした学習者Aは、「振り返り」に、「自分の持っている意見に上書きされるわけでもなく、受け入れてそれに対する意見を言うっていう所がおもしろかった。物に対する見方がふえた(?)話題もどんでんてきた。あと、話してよかったなあとと思った。楽しかった。」と記し、寛容 がコミュニケーションへの不安を緩和していることを見取ることができた。さらに、戯文の創作は意見の相違を可視化し、その戯文を用いて他者と対話をすることで、それぞれの意見への価値・意味の気付きがもたらされることが明らかとなった。

文学絵本（日本語及び英語）を介した対話実践の概要

実施日時：2021年11月16日（火）、17日（水）、18日（木）／学校名：福岡県筑後市立小学校
学習者：第2学年児童（31名）／授業者：筆者
単元名：英語の絵本を見て、聞いて、感じたことを話そう（45分×3時間）

小学校第2学年を対象とした実践では、教師が選定した英語絵本の読み聞かせを行った。新型コロナウイルス感染対策の配慮から、絵本をプロジェクターでスクリーンに拡大投影し、学習者同士が密集しないように配慮した。16日（火）は英語絵本の読み聞かせ、17日（水）は日本語と英語で書かれた同じ絵本の読み聞かせ、18日（木）はガイドブック・リーディング（リーパー、2011）の手法を用いた英語絵本の読み聞かせを行い、感想を交流することを計画していた。

しかし、読み聞かせを始めると、感想交流の時間を別途設けずとも、読んでいる最中に学習者たちから様々な疑問や感想、要求が日本語で提出された。三日間で合計6冊の英語絵本の読み聞かせを行ったが、学習者たちから最も活発な声が出されたのが『YO! YES!』（Chris Rschka, 2020）であった。最も多かった要求は、「（英語を教師等が一部を読んだ後で）声に出していいですか」と「もう一回読みたい」という発言に関する要求であった。これは、学習者の本心であり寛容のcにあたる。また、『YO! YES!』は同じ言葉でも絵に現れた状況や人物の表情によって意味が異なることが学習者たちにもわかり、それにより語勢や声の高低、抑揚も異なっていた。つまり、学習者たちは英語を日本語に直すことよりも、英語のままで意味や発話の違いを考えていた。これは、英語と日本語の相違をありのままに受け入れ、その維持のために、相違の内容を考えているという寛容のaにあたる。さらに、2回目以降の読み聞かせでは、頁をめくる間に、「言い方がおもしろい」「（絵の）ポーズが変だな」などの感想や「友達になった」などの解釈という「内言（思う・考える）」としてのことばが、自然に発されていた。このことは、寛容のbに繋がるものである。

学習の最後に、アンケートを実施した。「英語でも日本語でも、絵本の読み聞かせは楽しい。」が61%、「どちらかという、英語の絵本の読み聞かせの方が楽しい。」が35%、「どちらかという、日本語の絵本の読み聞かせの方が楽しい。」が4%という結果であった。「えいごの絵本の読み聞かせが楽しい理由」で最も多かったのは、「わからないけど、想像したり考えたりすることが楽しい」という類のものであった。

以上の実践から、国語科と外国語活動・外国語科の間をつなぐ「ことばの教育」の基盤として、互いの相違を受け止める寛容の醸成が求められることが見えてきた。そのためには、教師の問いに「答えさせる」授業から、学習者自身から「問い」や「活動」が提起される授業への転換が重要である。

最後に、筆者は、寛容のaとbのスタンスが満たされることがcのスタンスの条件であると述べていたが、外国語活動の学習が始まる以前の2年生では、「c：互いが抱えている本心や不安」の発露が比較的容易であった。外国語へのコンプレックスを蓄積させないためには、教科等として外国語の学習を開始する以前に、外国語に対する思いを語る場を設けることも考えられる。

引用・参考文献

- 大津由起雄・窪園晴夫（2008）『ことばの力を育む』慶応義塾大学出版会。
大山万容（2013）「国際理解教育としての小学校「外国語活動」と日本における「言語の目覚め活動」導入の可能性」『言語政策』9, 42-64。
中野重治・渡辺一夫（1949）「往復書簡」『展望』3月号，筑摩書房，31-41。
奈須正裕（2021）『「少ない時数で豊かに学ぶ」授業の作り方：脱「カリキュラム・オーバーロード」への処方箋』ぎょうせい。
難波博孝（2008）『母語教育という思想』世界思想社
西山教行（2009）「ヨーロッパ社会政策からみた『ヨーロッパ言語共通参照枠』と日本の第2外国語教育の展望」『ドイツ語教育』14。
浜本純逸（2008）『国語科教育の未来へ 国語科・日本語科・言語科』溪水社。
福岡教育大学附属福岡小学校（2016）「未来社会を創造する主体としての子供の育成 - 未来創造型の資質・能力に基づく新領域構想」『福岡教育大学・附属共同研究初等教育研究部・特別支援教育研究部 研究紀要』46。
福岡教育大学附属福岡小学校（2017）「未来社会を創造する主体としての子供の育成 - 未来創造型の資質・能力を育成する新領域の学習展開」『福岡教育大学・附属共同研究初等教育研究部・特別支援教育研究部 研究紀要』47。
山田深雪（2021）「コミュニケーションに纏わるペシミズムの克服：中野重治・渡辺一夫「往復書簡」を手がかりとして」『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要 教育学研究』2, 346-354。
山田深雪・河上裕太（2022）「「複数の自己」への寛容を目指す文学の授業実践：戯文という方法

論を用いて」『国語科教育』91, pp.36-44.
リーパー・すみ子(2011)『アメリカの小学校では絵本で英語を教えている』径書房.
Chris Rschka(2020)『YO! YES!』Cartwheel Books.
Teresa M. Bejan(2017) *Mere Civility: Disagreement and the Limits of Toleration*, Harvard University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 山田深雪	4. 巻 2
2. 論文標題 コミュニケーションに纏わるペシミズムの克服：中野重治・渡辺一夫「往復書簡」を手がかりとして	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要 教育学研究』	6. 最初と最後の頁 346-354
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山田深雪・河上裕太	4. 巻 91
2. 論文標題 「複数の自己」への寛容を目指す文学の授業実践：戯文という方法論を用いて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『国語科教育』	6. 最初と最後の頁 36-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20555/kokugoka.91.0_36	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山田深雪
2. 発表標題 国語教育と外国語教育を架橋する実践開発から見えてきたこと - 「寛容」という視座からの考察 -
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田深雪・河上裕太
2. 発表標題 複数の自己の「寛容」を目指した授業実践：戯文という方法論を用いて
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------